

特別企画 2016年春の叙勲受章記念インタビュー



2016年春の叙勲で佐賀大学名誉教授の三浦哲彦氏が瑞宝中綬章に輝いた。三浦氏は退官後、軟弱地盤研究所を設立し、地元技術者の育成と技術向上に努めてきた。これまでを振り返り「自分の専門分野に関するプロジェクトが県内で次々に動き、最高に恵まれていた」という三浦氏に話を聞いた。

2016年春の叙勲「瑞宝中綬章」

佐賀大学名誉教授 三浦哲彦氏に聞く

プロジェクトの原点は「低平地」

◎受賞の喜び

佐賀大学に赴任してすぐから、自分の専門分野に関わりのあるプロジェクトが今日まで続いたことは、とても幸せだった。研究ができた現場での実験にも関わることができ、それが今に至るまで続いている。自分一人でした仕事は、周りの方たちと一緒にした仕事。軟弱地盤の沈下という地元の問題を、地域の方の力を得て解決できたのが、受賞のベースではないかと思う。喜びというより、周りの方への感謝の気持ちの方が大きい。

◎思い出に残る仕事

自分が一生懸命になれるテーマが次々に舞い込み、思い出はたくさんある。その中でも佐賀に来て最初に取り組んだ広域地盤沈下との出会いは大きい。佐賀県出身で



5月12日に東京で叙勲伝達式が行われた

ありながら、それまで佐賀平野が広域地盤沈下で苦しんでいるというところを知らなかった。環境庁の依頼で調査をはじめ、どれくらい地下水をくんだら、どれくらい沈下するか因果関係を調べた。同時に佐賀空港建設計画の話が出た。海水の平均潮位よりも低いところに滑走路を造るといって、これまでにならなかつたことだった。沈下する地盤の上に盛土をして舗装するため、沈下量の予測をデータをもとに検討した。すると佐賀の地盤と他の地域の地盤に、同じ高さの盛土荷重を乗せると他の地域より2倍以上沈下することが分かった。それだけ地盤の圧縮性が高いということ、飛行機が乗って大丈夫なのか？との意見もあった。

しかし、検討していく中で地盤の水を抜くことで沈下を防ぐことができるというところが証明された。軟弱地盤のもっとも基礎的な問題である沈下の予測を行い、粘土状の地盤の上に飛行場をつくるという取り組みは、非常に刺激的でとても楽しい経験だった。

その数年前に六角川で大洪水が発生し、6層の河川堤防を7層にかさ上げするという動きがあった。検討会に加わり10年余り議論してきたが、軟弱地盤上に立つ堤防を1層かさ上げするために、さらに上から土を盛ると滑って壊れるということが分かった。そこで、深層混合処理工法を施し、地盤を強くしてから盛土工事を行うとい

うことを検討した。このプロジェクトでは、沈下とは違う地盤を強くするというところに着目した。興味を持ったのは、沈下によって地盤が強くなる圧密という現象。いかに上手く効率的に圧密をさせて、壊れない堤防を造るのがポイントだったが、河川を切って新しく堤防を造ると圧密の違う堤防ができる。現場で様々な工法での検証を繰り返して、設計・施工上の注意点や工法ごとの耐久性などが分かった。

それが終わったころ、建設中の空港道路でコラムアプローチ工法、コラムスラブ工法の開発に携わった。道路新設の工事が終わって数か月が経った頃、道路の沈下が始まった。段差緩和のため、県と共同で10種類の路盤工法を比較する現場試験を行う機会を与えられた。沈下してから補修するのではなく、建設費はかかるかもしれないが、はじめから沈下することを避けて道路を造ることで、のちの維持補修費を抑えようという考えを、そのころから検討していた。それが事業として認められ現在の「フローティング基礎研究会」がある。

「地盤対策は人間関係と同じ」

どんな状況でも、どうしようもないことはなく、はじめから手を尽くしておけば問題が起きないし、問題が起きても小さくて済むかもしれない。どうしようもないという言い方は私たち技術者には許されない。解決するためにどうするか、やってみないと分からないので、いくつかの方法を比較、観測する必要がある。すると、設計段階では分からなかつた原因が分かることがある。

同じ軟弱地盤でも、起る問題を解決できる最適な対策工法は一つ。適材適所がいつも念頭にある。地盤は場所によって深さによって全然違い、表面では分からないことが起る。そういう意味で地盤は人間と同じだという話を学生にもよくしていた。地盤の事はなかなか計算では分からない。分からない地盤相手に予測しながら、相手の様子を見ながら、対策をたてる。そういった部分が人間関係と似ている。

自分のやってきたことを振り返ってみると、目の前の問題を何と

かしようという、責任感で取り組んできたと思う。佐賀に戻ってきたすぐ「僕の10年間のテーマは「低平地」にあり」と直感した。それが、全てのプロジェクトの原点になっている。解決することの楽しさが、次なるモチベーションに繋がっている。自分の専門分野に関するプロジェクトが県内で次々に動き、最高に恵まれていたと思う。

◎土木業界に期待すること

若い方がなかなか建設業界に目を向けていないと思う。土木の仕事は生活の基盤を支える、そして住民に安心を与える仕事。若い人の目が向くような建設業界であってほしい。



6月8、9日に開催された「SAGA建設技術フェア」にて

【略歴】

三浦哲彦(みうら・のりひこ)。1937年7月9日生まれ。78歳。佐賀県唐津市出身。63年九州大学工学部土木工学科卒業。山口大学教授、佐賀大学教授理工学部長、佐賀大学低平地防災研究センター長を歴任、現在、佐賀大学名誉教授となり、軟弱地盤研究所所長、佐賀県都市計画審議会会長、国土審議会専門委員、唐津城石垣修復専門家委員会委員長などで活躍する。座右の銘は、會津八一の学規「一、深くこの生を愛すべし 一、省みて己を知るべし 一、学藝を以て性を養うべし 一、日々新面目あるべし」。最近、古文書の勉強を始めたことと笑顔を見せる。